

イザベラ・バード フットパスマップ 沙流川流域（日高町・平取町）



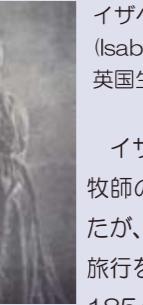
明治11年に来日し函館を経て平取まで旅した英國女性旅行家イザベラ・バードが辿ったとされる沙流川流域の日高町富川から平取町本町（義経神社）までの約15kmのフットパスコースです。沙流川流域に広がる牧場風景、水田・トマトハウスなど豊かな農村風景を楽しみながらバードが感じた当時の情景に思いを馳せながら歩きませんか？

イザベラ・バードの道を辿る会

2012年10月

イザベラ・バードが歩いた北海道の道

■ 英国の女性旅行家イザベラ・バードの人物像



イザベラ・バード
(Isabella L.Bird:1831-1904)
英国生れ。当時47歳

イザベラ・バードは、1831年に英國ヨークシアの牧師の長女として生まれました。幼い時から病弱でしたが、彼女は健康のための転地療養として多くの外国旅行を敢行しました。1854年のカナダ・アメリカ旅行に始まり、オーストラリア・ニュージーランド・ハワイ・騎乗によるロッキー山脈越え、中国、韓国、モロッコなど多数の国を訪れました。

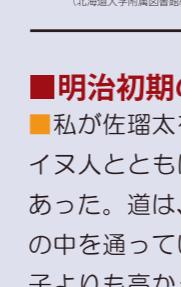
イザベラ・バードが訪れた当時の日本は、開港したばかりで日本の奥地を簡単に外国人が自由に旅行できなかった時代です。

ところが彼女はこの国でまだ外国人に知られていない地方を探検しようと考え、渡日後、47歳(1878年/明治11年)の時に北方(北海道)への旅行の決心し、通訳兼身の回りの世話係をする日本の青年(伊藤)一人を連れ、東北地方を経て北海道・函館、森町、室蘭、白老町を巡り、佐瑠太(現:富川地区)から奥地の平取アイヌ部落に向かったとされています。

■ イザベラ・バードの著書『日本奥地紀行』

イザベラ・バード(Isabella L.Bird)の旅行記『日本奥地紀行』(Unbeaten Tracks in Japan, 1885)によって、北海道と東北地方は世界に紹介されました。

特に、日本の先住民族として古くからの文化と伝統を守り、外国人にも分け隔てない思いやりを示したアイヌ民族を高く評価しています。



■ イザベラ・バードが来訪した歴史を伝える解説板

「イザベラ・バードの道を辿る会」では、北海道の歴史や自然環境を現代に伝え、地域の活性化につなげる手法として、バードが歩いた地としてゆかりの深い、森町、白老町、平取町に地元の協力を得て「バードが来訪した歴史を伝える解説板」を設置しています。



■この地図は、明治29年の旧版地形図を使用したものである。
■図中の立ち寄ったと思われる日付は、「日本奥地紀行」他の記述を参考にした。

■イザベラ・バードが歩いた道

日本初の馬車道開拓とつくれられた「札幌本町」

イザベラ・バードが訪れた沙流川流域

■ 沙流川流域の地勢・歴史

沙流川は、日高地方を流れる1級河川。日高山脈北部の熊見山に水源を持ち日高町富川で太平洋に注がれます。上流からウエンザル川・パンケヌシ川・千呂露川・額平川・仁世宇川などの支流があり、川名は、松浦武四郎の「東蝦夷詩集」にあるようにサルペツと呼ばれたこともあります。

沙流川流域には、江戸期に沙流アイヌの中心地で河口の富川は松前藩の日高七領の1つサル場所が寛政11年まで置かれ、日高地方西部における和人往来の中心になっていました。流域の開拓は、明治9年仙台藩士族が下流の佐瑠太(現在の富川)・平賀の低地に入植したのに始まります。大正2年に沙流土功組合が結成されて河岸低地は稻作化が進み、昭和に入る段丘の高台を中心には馬産と酪農が行われました。

上流域は、エゾマツ・トドマツ・イチイなどの針葉樹が多く日高管内でも第一の林産地帯で、明治43年王子製紙苦小牧工場の操業に伴い林産業が盛んになり、木材の搬出流送は昭和25年まで続いていました。

昭和23年、築堤工事が開始されましたが、昭和56年の全道的な集中豪雨では、下流部の耕地・牧場が冠水、流木の堆積による被害があり、近年では平成15年の水害が記憶に新しい出来事です。



■ 明治初期の沙流川流域の風景 『日本奥地紀行』より

私が佐瑠太を出発するときは、三頭の馬と、案内人である馬上のアイヌ人とともに出た。平取までずうっと、道は人のよく往来する道であった。道は、佐瑠太を出るとすぐに森林の中に入り、最後まで森林の中を通っていた。森には葦草が豊富に茂り、道を通る馬上の私の帽子よりも高かった。道幅は二インチにすぎず、草がはびこっているので、夜露にぬれた草の葉を、馬は絶えずかき分けて進む。私も、間もなく肩まで濡れた。森林の樹木は、ほとんどが柏と楡だけである。紫陽花属の蔓草が、白い花を咲かせながら樹木に一面に絡みついている場合多かった。

森林は、暗くて非常に静かである。この細い道が縫うように中を通っているが、他にも獵師が獲物を求めて通る小路もある。この「街道」は、深い沼地に入って行くこともあり、また木の根を丸太にしてお粗末にかけ渡してあるところもある。

私の馬が非常にひどい沼地で胸まで沈み、まったく抜け出せなかつた。私はその頭を這い上がり、馬の耳を越えてようやく大地に跳び上がつた。

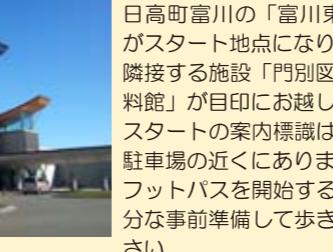
私は二人の少年に案内してもらい、丸木舟に乗って、佐瑠太川をできるだけ上流に遡ることにした。この川は美しい川で、筆舌に尽くしがたいほど美しい森や山の間をくねくねと曲がっている。

今まで誰一人として、この暗い森につまれた川の上に舟を浮かべたヨーロッパ人はいない。私はこの数刻を心強くまで楽しんだ。あたりは深く静まりかえり、淡青の空が浮かび、柔らかに青いヴェールにつつまれて、遠くは霞み「純化」されている。ニューイングランドの晩秋の小春日和のようなすばらしさであった。

明治後期に撮影された「沙流川日高管内を流れ沙流川沿いで荷を運ぶ人たち」(オーストリア国立ライエン民族学博物館所蔵)

■ フットパスのコースでは、こんな風景に出会えます！■

● スタート地点「富川東運動公園」のランドマーク



「門別図書館郷土資料館」

● トマトハウス景観 (No. 8~No. 13付近)



*駐車場と野外トイレが利用できます。

● 牧場景観 (No. 3~No. 5付近)

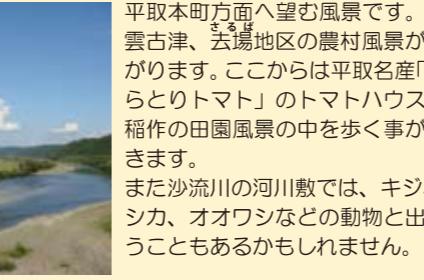


● 平取本町自然遊歩道 (No. 20~No. 23)



*このルートは、バードが歩いた道ではありませんが、森林を身近に体験できるコースとして新たに設定しました。

● 紫雲古津川向大橋から望む沙流川の風景 (No. 8)



紫雲古津

古津

橋

沙流川

河口

風景

No. 8

河口

沙流川

河口